

第五章 ひとつの現象

ひとりの男性

ひとりの男性の事実について、お話しします。その男性は、一九二六年に生れ、一九九六年に亡くなりました。名古屋駅の近くの歯医者の子次坊。生物学や化学に興味が深く、第二次世界大戦のとき、東京工業試験所という權威ある研究所で、水についての研究をしました。そのうち、陸軍士官学校（日本のファシ

ズムの中枢）に合格し、満州にいましたが、ソ連の参戦で、お手挙げ。シベリアの捕虜となり、エリートだったため、もつとも過酷な石炭掘り現場（ブガチャーチャという地名）へ連れて行かれました。その男性は後年、自分の長男に、シベリア当時の印象について、「お前、涙の出来ない悲しみというものがある、ということが、わかるか？」と自分の戦争体験を語り伝えました。その男性は、何とか生き延びて、二年三ヶ月後に日本に帰国しまし

た。名古屋の実家にたどりつき、なつかしの母と対面の瞬間、母は「お前、生きとったのか……」と、たいへん驚きました。情報が入らないから、死んだものと、あきらめきっていたのです。その男性は、岐阜大学農学部に入り直し、微生物の研究をする一方、ソ連の思想の影響か、学生運動の闘士となりました。日本共産党員でしたが、当時、日本共産党内がふたつに割れる中、つまらぬ嫌疑をかけられ、日本共産党から除名されました。社会運

動というものに嫌気がさし、今で言う、ベンチャー事業家になりました。印刷技術などにも長け、電子機器の土台である「プリント配線」の量産技術を開拓、愛知県豊田市で成功しました。ただし、経営そのもののプロではなかったため、自分が創った会社を辞めることになりました。名古屋大学農学部で、たいへん優れた生命についての研究が行われていることを知り、今度は、そちらの関係のベンチャー事業をめざしました。そのベンチャー

事業は、その男性自身が発見した、技術内容が、時代を飛び越えて新しすぎ、その男性の生前には成功せず、長男に受け継がれました。一九五六年三月生れの長男は、これまた変り者で、東京大学に入学し、センサーやコンピュータやロボットや通信について研究する学科（工学部計数工学科計測コース）にいました。人間の自由意志と物理の必然の矛盾の解決について、深く悩みすぎ、東京大学を中退してしまいました。でも、その現代科学に

ついて根源的に問う姿勢こそが、父から継いだベンチャー事業を学問化し、社会化するために、たいへん役に立っています。父から長男へ、無意識の教育があった結果でしょう。長男は今、そのベンチャー事業のためにこそ、まったく新しい発想の学校経営をめざしています。脱亜入欧の福沢諭吉の『学問のすゝめ』に対抗し、前亜超欧の『学問の転換』という専門家向けの本を一九九四年に自費出版し、脱亜入欧の象徴としての東京大学から離れ、

前亜超欧のもうひとつの学校経営のため、二〇〇五年に、たいへんささやかな第一歩を、踏みしめ始めました。

名古屋大学農学部の研究室

この、変り者の長男というのが、実は、わたしのことです。この、ひとりの男性の名は、山田俊郎^{としお}、わたしの実の父のことです。もうひとつの学校とは、もちろん、JOMONあかでみいのことです。わたしは、学習塾

教師や、マネキン紹介所（百貨店の販売員を紹介する仕事）の経理事務や、パソコンのソフトウェアの開発をやり、ぎりぎりの生活費を稼ぎながら、実にさまざまな独学を自由に行っていました。わたしが尊敬する知識人は多いですが、そのベストの二人の名のみ挙げ、わたしの新しい思想の背景を知る、手がかかりとしておきます。三浦つとむ、沖 正弘。三浦つとむ先生（一九一〇〜一九八九）は、実業学校中退の独学者でした。三浦つとむ先生

やわたしのような、独学のライフスタイルをひろめようというのが、まったく新しいデザインのもうひとつの学校、ホームページ・商品・イベント・チェンストア・関連活動をシステム化した、平和教育商業経営システム、JOMONあかでみいです。人間社会における人間の認識伝統を反省し、健康と平和のための認識を創造していきます。

一九七〇年代はじめ、父は名古屋大学農学部のひとつの研究室を訪ねました。父の講演

録によると、名古屋大学が農学部を新設する際、東京大学の五島善秋^{ごとう}先生が、自分の研究室の三人の部下（小島俊爾先生・大橋望東先生・山下昭治^{しやうじ}先生）を引き連れて、名古屋大学農学部の農芸化学・土壌肥料部門を築いた、そういう研究室です。植物がふつうの生長（栄養生長）から、花がつく、実がつく段階（生殖生長）へ移るとき、どういう物質が関与しているか。これがその研究室の真剣なテーマでした。（花成制御物質の追究）

アルコールに溶ける性質の物質（脂質）の中性画分というものの中から、それらしき物質を発見。たいへん優れた分析の結果、その正体は、 α -トコフェロール（通称ビタミンE）とユビキノン（今ごろ話題になっている、コエンザイムQ）である（両者は等モルである）ことを、つきとめました。ただし、驚くような薄さ（一リットルあたり10のマイナス12乗モル前後）において、微妙な量質転化があり、また、水中において脂質（水に溶けず

油に溶ける物質）が大切に働いている例でした。今からふりかえれば、さまざまなナノテクが追究しているナノ・メートル（10のマイナス9乗メートル）単位で計る現象の、もともと興味ある部分かもしれませぬ。驚くように薄いということは、自身が反応する、反応物質ではなく、何らかの反応に側面的に影響する、触媒作用に関係しているのでしょうか。父がその研究室を訪ねたころは、しかし、五島先生は定年退官、小島・大橋両先生は自

殺してしまわれたと、父は聞かされました。生命についてのたいへん微妙な研究であり、両先生は自殺というより、研究の最先端において、何か悪いものを、わからずに身に受けたのではないか、という説もあります。父は山下昭治先生おひとりと、共同研究を始め、ほかに新しい研究仲間三人も加りました。そういう中、ほかのだれでもなく、父がさらに新しい現象を発見し、のちにその現象を技術化しました。

新しい発見

つきとめた物質である、 α -トコフェロールとユビキノンのことを、トコフェロールとキノンの頭文字をとり、TとQ、と呼んでいました。TとQがつきとめられたあと、驚くような薄さにおいて、微妙な量質転化があるらしいことについて、動物の糸ミミズを用いた試験が、名古屋大学のその研究室で始まりました。父が研究室をはじめて訪ねたのは、

そのころです。

父は若いころ、化学実験の最高機関である東京工業試験所で訓練を受けたから、より正確な糸ミミズの試験を、父が担当することになりました。父は、二千本の試験管を用意しました。化学薬品として購入したTとQを、一リットルあたり10のマイナス何乗モルに薄めるか。マイナス10乗からマイナス14乗の液を、二千段階作って試験管に入れ、各試験管に糸ミミズを入れ、糸ミミズの生命のようす

を観察しました。

驚くような薄さの中、TQ液を微妙に濃くしていくと、糸ミミズがいわば無生物化してしまう点がありました。糸ミミズが成長も、腐敗もしない、酵素の活性がゼロの点がありました。この点をS点（スタティック・アクティブイ）と呼びました。TQ液をさらに微妙に濃くしていくと、糸ミミズが最高に成長する、酵素の活性が最高である点がありました。この点をK点（キネマティック・アクティ

ビテイ）と呼びました。

こうして、一回目の試験は成功しました。その先に、父の技術者としての慎重さがあり、新しい画期的な現象と技術を発見する、素養がありました。

父は、再現性のないものは技術にならないと、まったく同じ試験をくりかえしました。結果はどうだったでしょうか。二回目のデータはガタガタでした。

困りました。山下昭治先生は、「君の試験

管の洗いが悪いのだ。」と言いました。父は、自分の若いころの訓練と今の真剣さからして、「そんなはずはない。」と食い下りました。さんざん議論したあげく、初心に帰ろうということになりました。

新しい試験管を二千本買ってきて、三回目の同じ試験をしました。結果は、一回目と同じきれいなデータが出ました。ここから、父の推理が始まります。三回目の試験の試験管すべてに番号をつけました。試験管を父の腕で

きちんと洗い、番号順に並べました。今度は、TQ液でなく、試験管に水だけを入れ、糸ミズを入れてようすを視ました。弱くはありますが、S点とK点で折れかえすデータが得られました。さらに、S点の試験管とK点の試験管をいただきました。新しく買った二本の試験管のうち、ひとつにはS点の試験管のかけらを入れ、もうひとつにはK点の試験管のかけらを入れ、それぞれに、水だけを入れ、糸ミズを入れてようすを視ました。それぞ

れの糸ミズに、S点のようす、K点のようすが、現れました。

父はどう推理したのか。生命を促進したり、促進しなかったりするTQ液の効能が、試験管のガラスという無生物に、移るのでないか。これは、試験管の洗い方が悪くて、TQ液が残るということではない。TQ液が残らないようにしても、ガラスという無生物の物性が変化し、ガラスという無生物が、生命を促進したり、促進しなかったりする効能をもつよ

うになる。今までの物理学や生物学にはない、概念だが、現場の真剣さからは、そうとしか考えられない。二回目の試験のデータがガタガタになったのは、一回目の試験の際、試験管のガラスの物性が変化してしまい、それに気づかずに、二回目の試験において、試験管をばらばらに並べ替えてしまったからだ。

画期的な現象と技術

効能が移る。

新しい画期的な現象を発見した父は、今度は、

TQ液の効能をいろいろな物質に移す、という研究を手さぐりで始めました。今はそれは、ある物理的な装置を用い、再現性が保証された安定した技術として、確立していき

す。TQ液のみでなく、今度は、TQ液がなく

ても、たとえばある漢方薬の効能を、その漢方薬

21世紀に花開く TQ技術



山田 俊郎(1926~1996)

記念テレホンカードより

とは化学的に無縁な、ステンレスという物質に移す、

といった技術までが、同じ物理的な装置を用い、安定した技術として、確立しています。

こういう新しい画期的な現象と技術ですが、父がかつて「プリント配線」で成功したのとは異り、時代を飛び越えて新しすぎる、技術内容であり、父もわたしもその他の関係者も、人に説明するのに、たいへん苦労してきました。こちらがいくら真剣でも、ヘタな

説明のし方をすれば、こちらの頭がおかしい
のではないかと、疑われてしまいます。

しかも、東京大学でいちおう、応用数学・
応用物理を学んだわたしとしては、この画期
的な現象と技術を、ぜひとも理学的に解明し
たいと、真剣に挑みました。結果、かえって、
第四章に記した、デカルトやニュートンやア
インシュタインにある深い問題が、強調され
てくるばかりです。一方、第二章に記した、
齋藤守弘先生の「縄文記号」を、真剣な直観

をもち、追っかけるようになりました。

この画期的な現象と技術を土台として、脱
亜入欧から、前亜超欧への、情況転換が促進
されます。この研究はもともと、植物の花が
咲くときに関与する物質の追究でした。人間
社会の、闘争社会の中から、調和社会の壮大
な花が咲いていき、壮大な実を結んでいく過
程を、このベンチャー事業が促進するように、
わたしには、想われてなりません。

この画期的な現象と技術は、すでにTQ液

がなくても、成立しています。それでも、発
見の前提となった、名古屋大学農学部のだい
へん優れた分析に、あくまで敬意を表し、

TQ現象。TQ技術。

という呼称を用いています。

空間と場と真空と物質と生命。これらの区
別と連関。理論的な概念こそなかったものの、
そのあたりを表象的に直観した、古代人の世
界共通の「縄文記号」。(ただし、「縄文記号」
は、学問的に言って、象徴なのか、文字言語

なのか、記号なのか、議論の余地はあります。
縄文るねっさんす(新しい学問と新しい芸
術)の象徴としての、ひとつの現象、TQ現
象。

では、さっそく、この本の読者に、TQ現
象のごく一部を、体験していただきましょう。
わたしの顔を知らなくても、たとえわたしが
居るところから地球の裏側に居ても、この本
を手にしたお客さまはすべて、TQ現象のご
く一部を体験していただけるように、この本

という物質に、TQ技術を組み込みました。
もうひとつの全面的な物理学への、レッス
ン1です。(註。この本を印刷・製本するまで
お待ちください。)

塩の実験

わざと、味の悪い安い食塩を用意してくだ
さい。そしてその食塩は、決して、この本と
いう物質との距離を、五〇センチ・メートル
以内に、近づけないでください。

この本の裏表紙に、亀の図のアルミのシー
ルがあります。日本と世界の皆さま、一面的
な闘争社会から、全面的な調和社会へ、やす
らぎをまなぼう。この亀の名前は、やすらぎ
まなぶ君です。

やすらぎまなぶ君という名前は、TQ現象
とは直接、関係ありませんが、このアルミと
いう物質を、TQ技術により、特殊加工して
あります。

食塩をひとつまみ盛れるほどの、きれいな

薄い紙を二枚用意します。(ふつうのメモ用紙やコピー用紙で可。)

その二枚の紙に、食塩をひとつまみずつ盛ります。

食塩を盛った一枚の紙は、この本という物質に近づけないよう、その場に置いてください。そこから五〇センチ・メートル以上離れた位置に、この本を、やすらぎまなぶ君が上になるように、置いてください。やすらぎまなぶ君のアルミという物質の上に、いよいよよ

食塩を盛ったもう一枚の紙を、乗せてください。食塩が紙をはさみアルミの上に置かれま

す。食塩という物質が、アルミという物質に、直接触れなくてもよいです。

一秒も待つことなく、TQ現象「塩の実験」に入れます。

何が起るか。自分の味覚を研ぎ澄して、ください。

よう。何となくまるやか。下あごの奥のほうに、充実感がありませんか。

それでは次に、五〇センチ・メートル以上離れた、元のままの食塩を、なめてみます。どうでしょう。ツンとした、嫌な感じが、上あごの奥のほうに、ありませんか。

味覚が鋭い人も鈍い人もいますが、原始的な自然な味覚のある人ほど、両者のちがいが、明らかにわかります。また、今までの物理学や生物学の優等生で、「そんな現象は、

あるはずがない！」とまず思い込んでしまい、そういう概念や表象にとらわれて、自分の味覚が鈍くなるように支配されてしまう、「ちがいが、わかるような、わからないような……」という感想が出ることもあります。

TQ現象で変化した食塩は、からだに害はありません。(わたしたちは、先にご説明した、K点の現象しか扱っていません。)TQ現象で変化した食塩により、胃腸の調子が良くなった、という報告をいただいたこともあ

ります。でも、どういうことであれ、過ぎたるは及ばざるがごとし、です。TQ現象「塩の実験」がたいへんおもしろいからといって、食塩をなめすぎないようにしてください。

TQ現象について、より詳しいことは、JOMONあかでみいの研究用品の核である〈和道開運〉の解説書に譲ります。

〈和道開運〉。平和な商いの祈り。やすらぎをまなぶ。試せばわかる。

TQ現象を活用したTQ技術は、次世代の

生命技術であり、さまざまな分野において、無限の可能性があります。商品としてはまず、各分野の実用品の前に、研究用品そのものを販売いたします。わたしたちの素直な素朴な真剣な思想と祈りをデザインした広告品。〈和道開運〉は、平和を追求する日本の道が商いとして開運していくという意味。日本民衆の素朴な遊びごころある祈願グッズの伝統を未來的にデザイン。もうひとつの学校のおもしろ理科実験パネル。世界のパソコンのソフト

ウェアのバージョン・アップに対抗し、〈和道開運〉もバージョン・アップしていく。こういう発想の〈和道開運〉という商品を、ご用意いたします。TQ現象に興味ある人は、〈和道開運〉を用いて、思う存分、実験してみてください。

今までの流れ

わたしのめざすところは、今は不思議と想われている諸現象とその活用を、理性的に指

導し、運営していくことです。

TQ現象は、ある大手商社とある流通業界大手が目をつけ、関連商品が、世間の一部を騒がせたことがあります。その際、「二価三価鉄塩」が関係する現象、と説明されたことがあります。これは実は、抜き差しならない諸事情があり、とりあえずの仮の説明をするため、父が知人の技術者から、ある企業の脱酸素剤の理論を、借りたものです。そのように、父は自分の講演で証言しています。「π

ウオーター」と称する商品が、何種類か出て

います。その関係者の一部に、父がある原液を渡したと、父はわたしに話しました。しかし、父もわたしも、「πウオーター」の営業には、一切かわったことはありません。そこでどういものが販売されているか、まともにも推理、分析したことはありません。やむをえない事情があったにせよ、父が、「二価三価鉄塩」という真実でない説明をしたことについては、父に代り、わたしから深くお詫

び申し上げます。

父は、この時代を飛び越えた現象と技術について、実の長男であるわたしに対しても、具体的に説明することに、慎重でした。一九九二年夏になりようやく、ある人の仲介もあり、父はわたしに本格的な話を始めました。ですから、わたしはその時まで、父は何か変わったことをやっているな、という印象のみで、事の重大性をまったく理解していませんでした。

父もわたしも、主に経営面において、いろいろな苦労がありました。詳細は省きます。

なお、いくつかの会社のご尽力により、主婦の友社『健康』二〇〇四年二月号、『女性セブン』二〇〇四年三月十一日号、『FOCUS』二〇〇四年八月二十四日号、その他に、わたしの顔写真が出たことがあります。あるいは、ご覧になったことがある方も、いらっしゃるかもしれません。

仮説

父の代から含めると、わたしたちはもう三十年以上、TQ現象を体験しています。そういう中から、物理学と生物学に対し、新しい仮説を立てるようになりました。

あらゆる物質には、生命を促進したり、しなかったりする、生命促進性という性質がある。

こういう仮説です。通常は、この性質が弱いから、気がつかないだけです。わたしたち

は、この性質を自然界の極限にまで高める技術を、確立しました。

この生命促進性は、その物質の化学的な組成とはまったく無縁です。何らかの物理的な性質です。物質の状態には、熱的活動や磁化のほか、生命促進性という状態があるようです。

生命促進性は、物質の性質であり、状態ですが、さらに、場という、空間の性質の一面として、生命促進場というものがある。そう

から、相対性理論が障害になっていると、わたしは主張しているのです。

生命促進場・生命促進性にかかわる解明は、原子の電子殻や、原子核に関する、新しい発見を強く予感させます。

今、さまざまなナノテクが追究しているサイズの、物質内の微細な分布や活動や結合の様式に、わたしたちも関心があります。

ホメオパシーという、欧米の代替医療があります。TQ現象とホメオパシーは、溶液と

みると、仙人が山奥などから探ってきて、患者さまのために役立てたという鉱物、薬石やくせきに似ています。TQ技術は、薬石を、天然でなく、人工的に生産できるようになった、と表現してもよいでしょう。

話題の「トルマリリン」は、薬石の一種ですが、「マイナスイオン」と呼ばれているもの、「還元水」と呼ばれているものなどは、生命促進性という本質に、ようやく少しずつ接近してきている段階の技術であると、わたした

いう仮説を、わたしたちは立てています。

現代物理学においては、場というものを、「重力場」「電磁場」「弱い場」「強い場」と分類しています。わたしは、もうひとつの全面的な物理学を準備する立場から、「物体場」「電磁場」「原子場」「原子核場」と分類しています。いずれにせよ、そこに生命促進場という仮説がどう組み込まれていくか、これからの課題です。

このあたりに、電磁気学もかかわっている

いうものにおいて、溶質（溶けている物質）と溶媒（溶している物質・水など）で構成される溶液というものにおいて、溶質より、溶媒に着目するという点が、共通しています。溶質の分布より、溶媒（水など）の分子団の立体模様のあり方に、着目しています。

今までの物理学の一面性を克服するため、「原子論」より立体図形論を、回転性への着目を、わたしたちは大切に行っています。

TQ現象やTQ技術を、中国医学の観点で

ちは判断しています。これらについて、「波動」ということばを用いて説明しようとしている人たちも多いですが、より良い学問的な説明があると、わたしは考えています。

空間と場と真空と物質と生命。これらの区別と連関。

その解明には、残念ながら、まだ時間がかかります。

わたしたちは一方、TQ技術を核として、生命にとり大切なさまざまな要素を、総合的

に集め、次世代の生命技術を構築していきま
す。

場。原子核。水蒸気。水。ミネラル。油脂。
酵素。微生物。遺伝子。

なお、地球表面における生物系は、通常生
物と酵素と微生物の連関です。酵素のあり方
や、微生物のあり方は、人間社会がまだよく
知り、理解していない部分も多いです。とい
うことは、それらを知り、理解していけば、
健康や美容や環境に関し、新しい可能性もあ

る、ということです。

事業の精神

沖 正弘先生（一九一九～一九八五）とい
う、ヨガの世界的な権威の先生がいました。
先生の持論は、患者さまの治し方・治り方に
は三種類ある、というものです。ここでは、
ほかの先生の理論も加味し、わたしなりにご
紹介します。

その一。治す治し方。

患者さまの生理の病態を客観的に診断し、
患者さまの生理が常態へ移行するよう、薬や
機器などにより、治療する。西洋医学はこの
傾向であり、いわゆる医療です。患者さまの
生体に客観的に着目して、治す。

その二。治る治し方。

患者さまの病気が存在しにくい方向へ、患
者さまの環境や刺激を客観的に整備する。中
国医学はこの傾向であり、医療というより、
看護です。患者さまの環境や刺激に客観的に

着目して、自然に治るように働きかける。

その三。治さない治り方。

患者さまが病気になった原因は、患者さま
が生れてから今までの主体的な生活に、何ら
かの誤りがあったからです。姿勢動作のあり
方、呼吸のあり方、食事や排泄のあり方、異
性関係を含む人間関係のあり方、精神のあり
方、生活環境のあり方。体内感覚を磨きつつ、
姿勢動作・呼吸・食事・人間関係・精神・生
活環境の無自覚な誤りを、冥想により発見す

る。生活を悔いあらためると、いつのまにか
病気が自然に消えている。ヨガ（原始的な
修業）はこの傾向であり、医療や看護という
より、保健です。患者さまの主体的な修業の
あり方に着目し、修業の標準は示すが、患者
さまの自力更生に期待し、あえて働きかけな
い。

沖 正弘先生は、その三↓その二↓その一
の順序に重視し、統合医療というより、統合
保健をめざすべきである、というのが持論で

した。わたしは、沖 正弘先生に賛成してい
るから、JOMONあかでみいも、独学支援
システムにします。

TQ現象は、その二の治る治し方を目的と
して、さまざまに活用していくべきである、
というのが、わたしの判断です。今まで、T
Q現象にあまりに驚いた人は、その三の治さ
ない治り方や、その一の治す治し方を無視し
てもよい、という傾向まで出ました。それは
誤りであると、わたしの責任において、申し

上げます。

それにしても、TQ現象を、その二の治る治し方を目的として、さまざまに活用していくということは、患者さまのみでない、人間ひとりひとりの生活環境の整備、食物流通の整備、生物自身を強くする方向への農林水産業の整備、自然環境の整備にまで、拡張されます。本格的なベンチャー事業です。いわば栄養空間の創造です。

また、生命促進場を整備するということは、

実は、今の遺伝子工学以上の生命倫理が要求される、ということです。わたしが、TQ現象活用のベンチャー事業のためにこそ、JOMONあかでみいという、平和教育商業経営システムを、優先する理由です。

TQ現象に限らず、未来的な、実に有益な技術の種が、日本の中小企業には多く潜在しています。しかし、そういう中小企業の技術の種のところへは、お金に困っている、一攫千金を夢見がちな、良からぬ意図をもった人

々が群る傾向も、あるようです。「悪徳の新興宗教」みたいな、おかしな商いをやろうとする人も、あるようです。せつかくの未来的な、実に有益な技術の種が、多く発生しているのに、健全な商いや商い開発や技術開発や学問開拓を、まじめに着実に確立する努力が、不足していました。

わたしは、チエンストア育成の権威、『商業経営の精神と技術』（商業界一九八八年）などを著している、渥美俊一先生に、真剣に

注目しつつあります。（ただし、この試読の公開前に、渥美先生から直接、ご指導をいただいた事実はありません。）民衆全体のために安くて良いものを早く提供する、商人道の実行をめざしています。わたし自身は、商人としての訓練が不足していますから、正しい商業経営理論を、意欲において、知識において、経験において、深く理解しているプロを、平和教育商業経営システムの同志として、募集いたします。わたし自身の強みは、前亜超欧のための

教養を、すでに多く仕入れていることです。

わたしたちの素朴な公共精神を公に誓い、日本と世界のお客さまにぜひとも安心していただきたいと、まず、この本を書くことにしました。

現代のアメリカ文明の中核は、金融力と軍事力という片面のみに、執着しています。ほんとうの修業、すなわち、健康と平和のための学問と技能と規律の創出と使用、という反面からは、逃避しています。人間ひとりひと

りの認識の不自然と不自由を解消していきたくてです。とらわれるな。はからうな。

苦しみ悩みを悦び、やがては、楽しみ悟りに転化する能力。未来の現実を予想する能力。体内と世界を掴みます。背骨を伸して丹田に力がこもるようにし、眉間がさえるように肘を水平に張り合掌します。日本語なら「ありがとうございます。」と唱えます。現実にかような合掌と発声をしていない自分を予想するのみ

な合掌と発声をしていない自分を予想するのみ

でもよいです。精神を護る技能^{まも}です。

素直な素朴な現実確認のまじめさを追求して、負けない、死なない、凜とした勇氣と知恵。わたしは、人間ひとりひとりがそういう精神を身につけていくよう、ただ期待します。

私達は人類は一つで
あるという眞実をもつ
と深く考えてみなけれ
ばなりません。人類は
同じ悩みを抱えている
共同体なのです。

沖 正弘先生
『生きている宗教の発見』
(竹井出版 1985年) より